



WORLD
FEDERALIST MOVEMENT
OF JAPAN

世界連邦

2021年3月28日

NEWSLETTER 第664号

www.wfmjapan.org

発行所 世界連邦運動協会 〒107-0052 東京都港区赤坂7-2-17 赤坂中央マンション303
電話 (03) 6438-9442 FAX (03) 6438-9443 E-mail info@wfmjapan.org



wfmjapan

購読 郵便振替 00190-6-29964
1部100円(年6回 奇数月28日1回発行)
購読料は会費・寄付金に含めて収納

文部科学省、世界連邦宣言自治体全国協議会後援 第49回世界連邦推進全国小・中学生 ポスター・作文コンクール

第49回世界連邦推進全国小・中学生ポスター・作文コンクールは例年通り実施され、ポスター・作文の各部門からそれぞれ17点の優秀作品が選出されました。しかし残念なことに、首都圏の緊急事態宣言発令期間中により、開催予定だった優秀作品展と表彰式が中止となりました。やむを得ないとはいえ、毎年開催してきた表彰式さえ行うことができなかったのも、受賞された学生の皆さんへ記念になるものを贈呈したいという思いから急遽「優秀作品集」を作成しました。作成にあたっては、教育広報委員会副委員長・税所貴一執行理事に多大なるご尽力をいただきました。

コロナ禍の影響があったにもかかわらず、今年は全国からポスター部門には59校627点、作文部門には27校498点の応募がありました。

2021年度の本コンクールは50周年を迎えます。記念の年となりますので、特別な賞なども企画する予定です。引き続き各支部のご協力をいただき、たくさんの応募を期待しています。来年度の表彰式では、受賞された学生の皆さんの誇らしげな笑顔に出会いたいと思います。

(川口 美貴)

【ポスター審査講評】

廣畑正剛先生：色が美しい、形が面白い

など、そういう点では今年も頑張った作品が多く見受けられました。今年の特徴は、民族や人間だけではなく、地球規模で捉えた動物や、目に見えないダイオキシンなどの物質もテーマにして、うまくポスターとして仕上げています。また、「人間だけじゃない」を一つの着眼点にしてポスターを作成したのが目につき、描いているみんなの生き方やスタイルが見えてくる力作が多かったという印象を受けました。

一の瀬洋先生：審査にあたっては、なるべく明確なメッセージ性の強いものを重視し、似たようなものではなく、ご本人が感じて思いっきり自分なりの自己表現をしている作品が良いなと思い、そのような作品を今回多く受賞作に選びました。注目点には技術的・技能的な問題もありますが、それよりも「地球をどう思っているか」ということについて、精神性を重視している子どもたちの素晴らしさ、純粋さを強く感じました。私たち審査員も学ぶことがたくさんあります。また次回に向けて幅のあるいろいろなメッセージ・技術で好きなように描いていただければありがたいと思います。

【作文審査講評】

松香光夫先生：扱われているテーマは、戦争や平和のほか、広島・長崎への修学旅行、身近な出来事をもとにした感想など、

例年の作品に比べ全体的に多様性という点では及ばない感じがしましたが、感情の深みをうまく表現した力作が多く、これまではなかった新型コロナウイルスを主題とした作品なども今年の特徴でした。文部科学大臣賞受賞の渡邊君の作品は、身の回りで起きていること（学校などで習うこと）と平和との関わりを考えることが平和への道のりの通過点と捉える、その組み立て方が頼もしい。また湯川スミ賞受賞の大島さんも、小さな体験を平和のありがたみと捉え、その感覚を広めることで体験を共有したいという、前向きな姿勢を評価したい。次回のコンクールは50回目でもあり、ぜひ多数の作品が集まって欲しいと思いました。

立花典子先生：私がコンクールの審査をさせていただくのは、今回がちょうど10回目になります。毎回、応募作文を読ませていただいて強く感じるのは、こんなに真剣に平和を願い、環境を守ろうとし、差別や偏見をなくさなければならないと考える子どもたちがいることのすばらしさ、頼もしさです。今回も、自分の周りで、あるいは、世界で起きている出来事を真っ直ぐな眼差しで見つめ、考え、胸の中に沸き上がった思いを言葉にした作文の数々を感動しながら読ませていただきました。

作文の部・文部科学大臣賞「知る・認める・考える」 富士宮市立富士宮第二中学校一年 渡邊 春翔

僕が住む日本は、きれいで、治安が良くて、食べ物が美味しい住みやすい国だ。僕は当たり前のように学校で勉強できる。

習い事へ行ける。家でテレビを見ることができる。しかし、ずっと前からそうだった訳ではない。今から七十五年前の八月、日

本には原子爆弾が落とされた。外国と戦争をしたのだ。市街地は大きく破壊され、広島と長崎を合わせると三十万人以上の

尊い命がうばわれた。その後日本が降伏することで戦争は終わり、日本は平和な国への一步をふみ出した。戦争は終わった。だが人々は戦争を忘れてはいない。二度と繰り返してはいけない歴史として恐れている。それが如実に表れているのが日本国憲法三原則の一つ、戦争放棄だ。これを掲げているおかげか、あれ以来日本は直接的には戦争に関わっていない。では、世界はどうだろう。

僕が小学校六年生のとき、先生がこんなことを言っていた。

「アフリカの国々ではいまだに民族や国々の間で争いが続いている。」

僕たちが日常を楽しんでいる中、アフリカの国の人々は紛争から必死に逃げ延びようとしているかもしれない。あるいは、紛争で家族を失い、悲しみに暮れているかもしれない。そう考えると胸が締めつけられた。

このように、世界からはまだまだ戦争が

無くなりそうにない。では、どうすれば良いのだろう。答えは案外簡単なことだと思う。それは戦争を知ることだ。僕達は本当の戦争を知らない。だが戦争がどんなに悲惨で、どれだけ多くの命をうばうかは知っている。それは何故だろう。戦争を経験した人が僕達に語り、その恐ろしさを教えてくれているからだ。しかし、戦争を経験した人の数は年々減っている。僕達にはそれを次の世代へとつなぎ、永遠の平和を願う義務がある。そのためまず自分が戦争について知ることが大切だ。

また、お互いを認め合うことも重要だ。世界は広い。七十五億人もの人々が暮らしている。それらの人々は、全員が同じ言語・文化・考えまたその他のことを共有している訳ではない。その一つ一つを気にしてはきりが無いが、膨大なことだけは確かだ。しかし、人はすぐ自分が正しいと思込む。一度そう思うと、今度は相手が分からなくなってくる。それはやがて、相手へ

の反感へと転じ、けんかやいじめの原因となる。その拡大版が戦争と言えるだろうと僕は思う。つい最近、道徳が教科の一つとなった。それは、いじめが増えているため、みんなに道徳心を持ってもらいたいからだそう。まさに、お互いを認め合うことが重要だということを示す典型的な例だ。

戦争はいけない。戦争は世界を大きく変える。戦争は多くの命をうばう。そしてうばわせる。だれもが「戦争なんてしたくない。この世から消えて無くなれ。」と思っているはずだ。だが戦争は無くならない。何故戦争なんてするのだろう。議論することで解決できないのだろうか。戦争することのどこに利益があるのだろうか。戦争の恐ろしさを知っているのだろうか。次々に疑問が浮かんでくる。考えれば考える程出てきそう。こうして考えることも、平和への道のりの通過点だと思う。

知る・認める・考えるは、戦争が無くなった世界の三原則となるかもしれない。

ポスターの部・文部科学大臣賞
綾部市立上林中学校二年 佐藤 悠季



作文の部・特賞「あたりまえの毎日」
大館市立有浦小学校六年 片岡 よつば

普段は平和について考えることはほとんどないが、社会で戦争の勉強をした時や八月の終戦記念日にテレビから戦争のニュースが流れてきた時、私は平和につい

て考える。日本でも戦争があり、たくさんの人が死んだり、苦しい生活をしたりしていた。それはすべて戦争のせいで、戦争さえなければ平和なんだと思っていた。

しかし、今年、人々の命や生活をおびやかすものは、戦争だけではないことを知ることになった。新型コロナウイルスだ。学校が休校になり、友達に会えない日々が続

いた。オリンピックもなくなったし、何より、毎日ニュースで流れる感染者の数と死者の数に胸が痛くなる。病院や施設での面会もできなくなり、ふるさとに帰れない人もいる。家族と会えない人はどんな思いで暮らしているのだろう。いつになったら普通の生活に戻れるか分からない今の状況は、平和とは言えない。そう考えると、震災や豪雨災害も平和な暮らしを一瞬にして奪ってしまう。戦争がなければ平和なの

ではない。

では、私は今何ができるのだろう。過去の争いや病気、災害を悲しむだけでは何も解決しない。自分はまだ子どもだから何もできないというのは、逃げているだけだと思う。私にできることは、人の気持ちを考えること。年老いた人や持病をもっている人は、コロナをとても恐れているだろう。だから、感染を広げないように消毒をしたり、マスクをしたりしたい。医療従事者の

方やボランティアの方に感謝の気持ちをもって暮らしたい。学校で行う避難訓練を真剣に行いたい。ニュースで正しい知識を得て、正しい判断ができる大人になりたい。大きなことはできないけれど、人を思いやることはいつでもできると思う。

世界中の人に、あたりまえの毎日がもどる日がくることを心から願っている。

作文の部・特賞「平和な日々大切さ」 大館市立有浦小学校六年 虻川莉乃

平成二十九年八月二十九日。この日は、私にとって忘れられない日となりました。

「九才のおたん生日おめでとう」と、家族から祝福の言葉で朝を迎えるはずだった私の誕生日。しかし、今まで聞いたことがない携帯電話の鳴り響く音と、

「大変だ、早く起きろ」と、父の焦った声で私は目覚めました。何が起きたかわからないまま飛び起き、枕を頭にあて家族と身を寄せ合いました。父に状況を聞くと、北朝鮮が弾道ミサイルを発射し、警報システム「Jアラート」が鳴ったとの事。話を聞いている最中も J アラート

は鳴り響き、ミサイルはものの数分で大館市に近づいて来ているという。私達家族は恐怖におびえながら、ただただミサイルが大館に落下しない事を祈るばかりでした。運良くミサイルは北海道襟裳岬東の太平洋上に落下し、被害はなく一安心したのを昨日のこのように覚えています。私はこの時まで、戦争なんて昔の事と軽く考えていたし、家族がいて、ご飯を食べて、きれいな洋服を着て———全ての日常の平和をあたり前だと思っていました。

日本は今年の八月、終戦から七十五周年を迎えました。戦争を体験した人々は高

齢化し、戦争を知る人は少なくなってきました。実際に私の祖父も戦争の体験者でしたが、昨年亡くなりました。私たちは、祖父が体験した苦しみや悲しみを無駄にする事のないよう、戦争の悲しさや平和の大切さを周囲に語りつぎ、二度と戦争を繰り返す事のないようにしなければいけません。それが戦争を知らない私たちに出来る事として与えられた役目だと思います。

まもなく私の十二回目の誕生日が来ます。三年前のあの日を繰り返すことなく、平和な朝を迎えることが出来るように。

作文の部・特賞「世界を変える」 岡山県立岡山大安寺中等教育学校三年 寺西 真友子

「偏見を持つてはいけない」、日常生活の中でもよく耳にする言葉です。しかし私たちはその言葉の意味を本当に理解しているのでしょうか。また意味をきちんと理解していても実際に自分の行動の中でそれができているのでしょうか。例えば、世界の国々に対してのイメージはどうでしょう。「核兵器をたくさん保有しているからこの国は怖い」「この国は親日だから好感が持てる」といったイメージが私たちの中にはあると思います。このイメージ自体は偏見ではありませんが、もしその国の人々と交流するとなるとどうでしょう。それらのイメージは少なからず私たちの接し方に何か影響を与えることがあると思います。

昨年十一月、私は「岡山県中学生韓国慶尚南道交換留学」というプログラムで韓国の慶尚南道市を訪問しました。もともと韓国の文化に興味があり、二年前に同じプログラムで日本を訪問した慶尚南道の中学生のホームステイを受け入れたことがきっかけでした。訪問団に選ばれたことが信じ

られないまま説明会に参加したのですが、厳しい現実をつきつけられました。当時、日韓の社会情勢は最悪といわれ、韓国にいる日本人が嫌がらせを受けるなどの被害もありました。実際、訪問中止の可能性が大いにありました。しかし、岡山県と慶尚南道の教育委員会の方々のご尽力で、実行が決まりました。それでも情勢が変わることはなく、私は不安を抱えていました。

しかし、韓国での経験は私たちの予想とは全く別のものとなりました。現地の方々はとても手厚く私たち訪問団を歓迎してくださったのです。訪問した県庁や三つの学校では職員や生徒の皆さんが列を作って大きな歓声と拍手を送ってくださいました。伝統楽器を使った演奏を披露してくださいったり、校舎の窓から手を振ってくださいたりしました。それはまるで私たちを安心させようとしてくれているかのようでした。あの時の感動、そして安心感は今でもはっきりと覚えています。国と国の関係

がどうであっても私たち人間は温もりを共有することができるのだと感じました。

そして、私が更に驚いたのが、韓国の方々の語学能力の高さです。英語の水準がとても高く、実際に授業へ参加して日本との差を痛感しました。そして、英語でのコミュニケーションを通じて、英語は私たち人間がひとつになるためにとても大事な要素であると分かりました。また、たくさんの方が日本語で話しかけてくださり、とても私たちに好意的でした。訪問団の皆がもっと韓国語を勉強してくればよかったと思うほどで、言葉が通じるということの重要性に気づかされました。

このように、人々の心と国の情勢は必ずしも結びついていません。つまり、私たち一人一人の行動や接し方を変えていくことで国の情勢をも変えることができます。そして、海外の方と交流を深めるためには言語がとても大切です。世界を変えることができるのはこの世界にいる私たち自身なのです。

作文の部・湯川スミ賞「私達が平和に暮らせているのは」 岡山県立倉敷天城中学校一年 大島 実桜

みなさんは、「平和」について深く考えたことがあるだろうか。あまり考えたことのない人が多いと思う。私も、長崎に平和学習に行くまでは、そんなに考えたことがなかった。その原因の一つとして考えられるのは、私達が住んでいるこの世界は平和だから、ということだ。私達は大きな戦争も、不自由な生活も体験したことがないのだ。しかし、体験していないから、終わったことだからと言って、忘れてしまっているのだ。過去にあった、つらい出来事も次の世代に受けついで伝えていかなければならないのだ。

私は去年の八月に長崎県に行った。戦争のことや被爆のこと、「平和」について学ぶためである。平和祈念館に行ったり、被爆者の方々にお話を聞いたりした。また、被爆していない若い方々がつくった紙芝居も聞かせていただいた。その後は、平和祈念式典に参加した。長崎に行って、たくさんの貴重な体験をすることができた。その中でも三つのことを紹介したいと思う。

一つ目は、被爆者の方々による体験談

だ。戦争が終わってから七十五年が経つため、そういうことを語ってくださる方々が減っているが、お話を聞くことができた。その内容は、今は平和な日本に本当にあった出来事なのかと疑いたくなってしまうほど、悲惨なものだった。何故、無実の人達がそのような目にあってしまったのか。私は、とても悲しくなった。また、原爆で亡くなった人も多いが、その後の後遺症で苦しんだ人が多かったということに驚いた。放射線をあびてしまい、体にたくさんの害があった。とても苦しかっただろうと思う。このように辛く、苦しい出来事を、何故語ってくれたのか。それは、私達若い世代に知ってもらい、もっと先の人達にも知ってもらうためだと思う。私達が、この悲惨な出来事をもっと知り、たくさんの人々に伝えていきたいと、強く思った。

二つ目は、平和祈念式典に参加したことだ。八月九日に行われるため、とても暑い。しかし、たくさんの人々が参加していた。この様子はテレビで毎年中継されている。この式典に参加することで、今、私が生き

ているこの「日常」は、当たり前ではないということを痛感した。それと同時に、「平和」であることへのありがたみを感じた。平和な日常に、ありがたみをもって生きていきたい。

三つ目は、戦争や原爆のことについて伝えようとしている、若い世代の方々だ。私はまだ何もできていないのに、すごいと思った。また、具体的にどのように伝えればよいのかも分からなかった。しかし、彼らのように、紙しばいや絵本など、誰でも分かるもので表せばよいと、気付くことができた。人に伝えるのは大変なことだけれど、私も、少しでも伝えていきたいと思った。

私達が平和に暮らせているのは、過去があったからだ。辛いことを乗り越えて、頑張ってくれた方々がいたから、今の「平和」があるのだ。しかし、その事を忘れて平和に暮らしてはいけない。後世に伝えていくのが大切なのだ。この生活に感謝しながら、たくさんの人々に伝えることで、「平和」を共有していきたい。

ポスターの部 入賞作品



特賞・森川 姫花
海津市立平田中学校三年



特賞・沖本 七海
武蔵野市立桜野小学校二年



特賞・上原 萌愛
武蔵野市立大野田小学校六年



湯川スミ賞・山田 優羽
青梅市立新町小学校六年

世界連邦推進全国小・中学生 ポスター・作文コンクールの表彰伝達式を開催ー京都府綾部市ー

京都府綾部市では3月8日、綾部市役所において「地球市民の集い実行委員会」（委員長 山崎善也綾部市長）が主催して、世界連邦推進全国小・中学生 ポスター・作文コンクールの表彰伝達式を開催しました。この日は、同実行委員会構成団体の綾部世界連邦運動協会・鹿子木旦夫（かなこぎ とさお）会長や綾部市議会・荒木敏文議長・綾部市教育委員会・足立雅和教育長も同席。



あいさつに立つ山崎市長

あいさつに立った山崎市長は、コロナ禍にあって本コンクールに作品を寄せてもらったことに対し、関係者へ謝意を示すとともに、入選者に祝意を表しました。また、綾部市が他の自治体に先駆けて「世界連邦都市宣言」を行なったこと、地球規模の問題を世界が一つになって解決していかなければならないこ

となど、世界連邦の意義を説明。「こうした風土を誇りに思い、次の世代につないでいかなければならない。それが今を生きる私たちの大切な役割・使命ではないかと感じている」と述べました。



山崎市長から受賞者へ賞状の伝達

続いて、最高位となる文部科学大臣賞を受賞した佐藤悠季（ゆうき）さん（中学2年）ら3人に山崎市長から賞状や記念品が手渡されました。本コンクールの応募にあたっては、同委員会が市内でコンクールを実施し、ポスター・作文の部において各6作品ずつを全国コンクールへ出品していました。同市でのコンクールは29回目を数え、今年はポスターが13校163点、作文

が3校60点の応募がありました。

京都府では新型コロナウイルス感染症による緊急事態宣言が先月で解除され、当日は受賞者全員が保護者と参加。時間や手間をかけて仕上げた作品を評価してもらい、緊張の中にも誇らしげな顔が見られました。



註 「地球市民の集い実行委員会」の構成団体：綾部市、綾部市議会、綾部市教育委員会、綾部市市民憲章推進協議会、（一社）綾部青年会議所、綾部世界連邦運動協会

（村上 智規）

第二日目 京都芸術大学・京都芸術劇場春秋座で「藝術文化学術フォーラム」開催

2020年11月18日と19日、世界連邦日本国会委員会・京都芸術大学の共催、外務省・日本国際連合協会・国連広報センターの後援で「国連創設75周年記念事業」が行われた。18日には参議院議員会館特別会議室で「平和フォーラム」が行われ、19日には京都芸術大学のキャンパス内にある京都芸術劇場春秋座で「藝術文化学術フォーラム」が開催された。

初日の「平和フォーラム」については前号に掲載した。今回は二日目の「藝術文化学術フォーラム」について掲載する。「藝術文化学術フォーラム」は、国会で行なった「政策的な討論」とは対照的に、「文化の力で国連を盛り立てていく」というのがテーマである。

開会に先立って、和太鼓教育センター和太鼓サークル「眞炎」により、迫力ある和太鼓でウェルカムパフォーマンスが行われた。

司会は前日に引き続き、京都芸術大学客員教授でもある谷本真邦世界連邦日本国会委員会事務局次長がつとめ、開会が宣言

された。プログラムの冒頭には、尾池和夫同大学長（京都大学元総長）よりウェルカム・スピーチがあった。また、当日諸事情で出席できなかった宗教学者の山折哲雄博士（国際日本文化研究センター名誉教授）からの開催趣旨書を、京都芸術大学SDGs推進室長に就任した田中朋清氏が代読した。

ファブリツィオ・ホスチャイルド国連事務次長／国連75周年記念担当事務総長特別顧問のビデオメッセージがあり、その後に、デイビット・マローン国連事務次長／国連大学学長による基調講演が行われたが、前号に掲載した1日目の講演と重複する面も多いので割愛する。

続いて元国連事務総長特別代表の明石康氏より基調講演が行われた。明石氏は日



尾池 和夫氏

本人国連職員第一号であり、重光葵外相（当時）の国連加盟演説を直接聞いたことなど、自身の体験に基づいて国連の歴史を述べた。

ここで休憩に入り、休憩中は著名な時代文化考証者でもある友吉鶴心氏による薩摩琵琶の演奏が行われた。

休憩後、中野寛成世界連邦運動協会会長代行より祝辞があった。中野氏は世界連邦運動の目的を紹介しつつ、物理学者アインシュタイン博士が湯川秀樹



明石 康氏



中野 寛成氏



パネルディスカッションの様子

博士と会った際、「私の理論のためにあなたの国に原爆が落とされて申し訳なかった」と言って涙を流し、ともに世界連邦運動を推進したというエピソードに触れ、京都は世界連邦運動に縁があること、今回は国連創設 75 周年だが、日本は、国連創設 60 年と、日本の国連加盟 60 周年の記念の年に、衆参両院で正式に世界連邦実現を目指す決議を行なっていること、国連議員総会や国際連帯税・国際刑事裁判所などの具体的な活動を紹介した。

経済界からは、パナソニック代表南部靖之氏が取り組みを紹介し、「企業は売り上げ・株価を気にして動くが、今回のコロナ渦は『真の豊かさとは何か』を考えるきっかけとなった。パナソニックは東京丸の内にあった本社機能を『国産みの地』淡路島に移し、2025 年の万博までに真の豊かさのモデルケースを世界に示そうと考えている。」と述べた。

パネルディスカッションを開始するにあたり、茶道の北見宗樹氏の指導のもと、京都芸術大学茶道部教職員の栗本徳子氏と学生によって登壇者にお茶がふるまわれた。

パネルディスカッション「国際社会における芸術文化学術の活用による全人類の連帯構築の可能性について」では、日本国際連合学会理事長で関西学院理事の神余隆博氏（元国連大使）がモデレーターとなり、先進 14 カ国の中で日本における国連への好感度が一番低かったということが触れられた。その後、各パネラーがそれぞれ意見を表明した。

日本ユネスコ協会連盟の鈴木佑司理事長は、ユネスコ憲章前文の「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」に触れつつ、冷戦後は特に途上国に文字を伝える活動が行われたことを紹介した。

今年帰国したばかりの前国際連合大使の星野俊也氏は、紛争・テロなど作為的に起こされる危機のほかに、気候変動や感染症の拡大など、目の前の問題に無関心で生活スタイルを変えようとし「不作為」によって起こされる危機があることに触れた。また、2020 年 9 月 21 日の「国連創設 75 周年宣言」で「国連以外に、正統

性を有し、招集する力があり、規範的な影響があり、より良い世界にむけ多くの人々に希望を与え、皆が求める未来を実現できる地球規模の組織は存在しないが、逆に言えばこれを強調しなければならないほど分断が深刻になっている」と述べた。

TV などでも活躍している京都芸術大学客員教授の中野信子氏は、脳科学者の立場から、人間が持つ、妬み、他者の失敗を願う気持ちなどのネガティブな感情をどのように処理するべきかという問題を語った。そこには、頭・理屈で考えたものよりも、肉体的・直感的に感じたものを信じたいという人間の心の難しい部分が関与している。この解決にあたり、文化・芸術の持つ役割は大きいと述べた。

京都大学環境科学センター センター長の酒井伸一教授は、「温室効果ガス排出ゼロを目指すことが大切であるが、そのためにも文化の果たす役割は、物質への依存を最小限に抑えた経済システム、社会を構築する手助けになると信じる」と述べた。

京都芸術大学 SDGs 推進室長の田中朋清氏（世界連邦日本宗教委員会事務局長）は、「世界連邦日本宗教委員会は宗派の違いを超えて平和のために活動しており、特に 1982 年以来パールハーバーで亡くなった人々のために祈りを捧げてきた。当初は地元の人から反発もあったが、次第に理解が得られ、ついにはオバマ大統領と安倍晋三総理によるステートメントを得られるに至った。SDGs や平和の実現には、価値観や宗教観の違いを乗り越えて互いに尊重し合い、認め合うことが大切で、そのための教育も重要である」と強調した。

松竹芸能株式会社取締役の小林敬宜氏（京都芸術大学客員教授）は、伝統文化を後世に伝え、心を豊かにすることの必要性

を訴え、「新型コロナにより、お客様がいなくて演じなければならないのは、演者にとって酷な状況であるが、一方、配信が発達したことは、言葉の壁はあるものの、文化伝統を世界に広げるチャンスである」と述べた。

以上を踏まえて、コンクルージョンとして世界連邦日本国会委員会有識者諮問機関座長の長谷川祐弘氏（元国連事務総長特別代表）が、全体を振り返りつつ、「どのようにして国連そして多国間協力を進めていけるか、国連が創設 100 年を迎えるまでにはどうしていくべきか検討する必要がある」と述べた。

最後に、京都芸術大学徳山豊理事長、国連大学デイビット・マローン学長、グローバルガバナンス推進委員会の長谷川祐弘座長により芸術文化学術・京都宣言の署名・調印式が挙行された。宣言には持続可能な開発目標（SDGs）を達成するにあたって文化や芸術の果たす役割に関して議論が深まったと示し、芸術文化学術の力を活用して、国連 100 年に向け、全人類の連帯による平和構築並びに SDGs 達成を推進するために協働することを誓っている。

エンディングでは、この式典に華を添えた KIMONO プロジェクトの紹介、歌手の島谷ひとみさんより SDGs の応援歌「CYCLE ～サイクル～」、ヒット曲「亜麻色の髪の乙女」の歌唱が行われ、17 時半頃閉会した。

各方面の方々のご尽力により、これだけ大きな規模のイベントを二日連続で行うことができたことをうれしく思う。産業界・学術界・政界・官界・宗教界・芸能界などさまざまな方面の方々にご協力いただいたことも今後への大きな希望である。企画・各界との調整にあたった谷本真邦次長のところには毎日ひっきりなしに電話がかかってきて、その忙しさを目の当たりにした。一部の学生は東京・京都二日連続でボランティアとして働いた。こうして若い世代が大活躍していることは、世界連邦運動の未来にとって明るい兆しである。

（塩浜 修）



会員の声 1945年生まれから見た“戦争と平和”(その3)

金沢支部 平口 哲夫

一家が金沢工業専門学校（金沢大学工学部の前身）の“長屋”住まいをしていた頃、裏庭で赤トンボ捕りをしていたら、帰宅した父が母親に「また戦争になるかもしれんぞ」と言い、母が「まあ、いやだわ」と応じている会話が窓越しに聞こえてきた。いま思うに、この「戦争になる」とは、日本が朝鮮戦争（1950～1953）に巻き込まれることを意味していたのであろう。1951年、6歳のときに“長屋”から現・金沢市平和町の官舎に引っ越しをしているので、上述の出来事は1950年秋、5歳のときの思い出であると言える。

朝鮮戦争の勃発により、1952年、米軍が使用する砲弾の需要が急増し、日本国内のメーカーから納入される砲弾の性能を検査するための試射場が必要となった。この試射場として最終的に決定されたのが内灘砂丘であったことから、石川県の内灘村（現・内灘町）の村議会は反対決議をし、北陸鉄道労組が浅野川線による資材搬入に反対してストライキを行うなど、反対運動が盛り上がった。そうした抗議活動を撮った写真が新聞に大きく掲載されているのを見た記憶がある。また、米軍が内灘で砲弾試射を開始したのは1953年3月13日からであり、同年4月から小学2年生になった私が、近所の子どもたちと一緒に自宅近くの運動場で遊んでいると、時どき砲弾の発射音や炸裂音が遠くから響いてきたことがあった。1956年まで米軍が使用しつづけた試射場は、1957年3月30日に正式に返還された。それまでは、内灘隣接

の金沢市栗崎海水浴場に出かけた際などに米軍兵士を見かけることもあった。東北大学文学部に入学した1965年に内灘町営海水浴場が向栗崎海岸に設けられたが、その頃はまだカマボコ形の倉庫や、銃弾製造過程で出来た円形穴だらけの大鉄板を敷き詰めた道路など、試射場当時の名残が多く遺されていた。

内灘砂丘が米軍の砲弾試射場として使われたときの「試射場射撃指揮所」跡は内灘町千鳥台にあって内灘町の文化財に指定されており、「着弾地観測所」跡は内灘町宮坂と内灘町西荒屋の2カ所において内灘町の史跡に指定されている。「着弾地観測所」跡のうち、保存状態が比較的良好な宮坂のほうには一人で、あるいはセミナーの学生を連れて何度も訪れているが、西荒屋のほうにはまだ一度も足を運んだことがない。添付の写真は、遊歩道などの整備後の2013年9月18日、宮坂の「着弾地観測所」跡を訪ねた際に撮ったものである。現地の案内板には、発射された砲弾の目標への的中率と爆発・不発の確認を行なった着弾地観測地であること、通称O・P（オペレーション・ポイント）と呼ばれ、見晴らしの良い丘の上に建てられたことなどが記されている。金沢医科大学の近くにある内灘町歴史民俗資料館「風と砂の館」には、戦後基地反対運動の先駆けとなった内灘闘争の展示コーナーも設けられており、同大学「総合人間科学」科目の一環として開講した「戦争と平和」の受講生を連れて見学したこともある。

1952年に締結された日米安全保障条約を前提として、内灘の砂丘地を在日米軍の砲弾試射場として使用するための接收交渉の通知が日本政府から内灘村に出されたことに対して、村議会が接收反対の決議をしたのは当然である。米軍が自分たちの村にいてのことに対する嫌悪感だけでなく、接收されることによって村民の生活が脅かされることは目に見えていたからである。実際、砂丘地が広範囲に接收されて村と海が鉄条網で仕切られると、地引網は引けず、貝類の採取もできないなど、漁民の生活は成り立たなくなった。また、砲弾試射が開始されると、民家の屋根瓦はズリ落ち、家畜は驚き、鶏は卵を生まなくなり、幼児はヒキツケを起こし、女性は恐怖から畑仕事に出られず、学校の授業も妨げられることになった。このような砲弾試射場が住民にもたらした被害をさらに大きく深刻なものにしているのが、現在の沖縄の米軍基地であることを想起するならば、内灘闘争は日本の一地域における歴史的一幕に終わるものではない。

朝鮮戦争は、1953年7月27日に国連軍と中朝連合軍が朝鮮戦争休戦協定に署名し休戦に至った。その4年後に内灘の砲弾試射場が返還されたのは、試射場反対運動によるだけでなく、東アジアの情勢変化によって内灘砲弾試射場の必要性が低下した結果であろう。このことは、現在における沖縄などの米軍基地問題を解決するには、東アジアにおける軍事的緊張を和らげる外交が重要であることを示している。現在、軍事的緊張が高まり、程度の差はあれ各国が軍拡の方向に転じているだけに、世界連邦という視点からの提言がいっそう重要性を増していると思う。

（つづく）



2021年度定例総会招集告知

下記のごとく世界連邦運動協会 2021 年度定例総会を開催しますので、ご出席願います。(新型コロナウイルス感染拡大の影響により、オンライン開催や書面開催、延期などの可能性があります。最新の情報につきましては支部や本部にお問い合わせください。)

日時: 2021年5月9日(日)

午後1時～午後4時30分

場所: JICA 地球ひろば 国際会議場

(東京都新宿区市谷本村町 10-5)

議題:

①2020 年度会務報告に関する件

②2020 年度決算・監査報告に関する件

③2020 年度運動方針・活動計画に関する件

④2021 年度予算に関する件

⑤会長・会長代行・副会長・監事選出に関する件

⑥支部提案

⑦その他

< 註 1 >

総会は支部および団体会員から選出される代議員と役員によって構成されます。会員はオブザーバーとして出席することができますが、会場の席数に限りがありますので、出席希望される方は予め申し出

ださい。

< 註 2 >

支部提案のある支部は支部名、提案題名、発表者名を 4 月 10 日までに事務局まで送付してください。お早目に提出いただけると、事前に理事会などで話し合い、深く検討することが可能になります。なお、当日の提案理由は簡明に述べ、所要時間節減にご協力ください。

< 註 3 >

「JICA 地球ひろば」の最寄駅は市ヶ谷駅
地図

<https://www.jica.go.jp/hiroba/about/map/>

本部と支部の主な動き

*は本部・支部主催ではないが、世界連邦運動協会が加盟している団体の主催
註: コロナ感染拡大の影響で変更になる可能性があります。

2 月 12 日	核兵器禁止条約と日本の核軍縮政策に関する 討論会 (核兵器廃絶日本 NGO 連絡会主催) *	3 月 31 日	世界連邦日本国会委員会役員会
		4 月 16 日	世界連邦運動協会理事会
3 月 5 日	世界連邦運動協会執行理事会 (オンライン開催)	5 月 9 日	世界連邦運動協会総会

編集後記

☆東日本大震災 10 年目の春を迎え、「皆さんが寄り添ってくれたお陰で今の私たちが元気で居られるんだと思っています」という、大切な人からの言葉は、無力な自分を許してくださったかのように感じられました。これからも福島の方々とのご縁を大切にしたいと思っています。(川口) ☆先日、執行理事会を初めてオンラインで開催した。新型コロナにより、しばらく上京をためらっていた執行理事も多かったが、このたびオンライン上とはいえ、久しぶりに元気な顔を見ることができて嬉しかった。(塩浜) ☆東日本大震災発生から 10 年目になっても未解決の問題があまりにも大きく、その後も毎年のごとく各地が自然災害に遭い、さらに COVID-19 禍に曝されて、社会全体が大変な状況になっており、自身が対応しなければならない困難な諸問題も抱えて苦慮している昨今です。(平口) ☆新型コロナウイルスのワクチン接種が始まりましたが、予断を許さない状況です。多様な開催手段が選択できるように事務局運営も工夫していきたいと思っています。(野田) ☆世界連邦日本国会委員会有識者機関でも提言された「日本人が国際機関幹部ポスト獲得に戦略的に取り組むための関係省庁連絡会議」設置が実現した。世界連邦実現には国際機関の強化も大切だ。国会決議もした日本がこれを促進するためにも、ぜひ進めていきたい。(谷本)

編集委員会 / 委員長: 川口美貴 副委員長: 塩浜修・平口哲夫 委員: 野田武志・谷本真邦

あなたも世界連邦運動協会の会員になって一緒に活動してみませんか

入会希望の方は、郵送かFAXまたはEメールにて、住所・氏名・電話番号・メールアドレスを本部事務局へお知らせください。またEメールでお申し込みの場合は、件名に『入会申し込み』と明記してお送りください。

普通会員年額5,000円 維持会員年額10,000円 賛助会員年額15,000円



WORLD
FEDERALIST MOVEMENT
OF JAPAN

世界連邦運動協会 本部事務局

〒107-0052 東京都港区赤坂7-2-17 赤坂中央マンション303

電話 (03) 6438-9442 FAX (03) 6438-9443

E-mail info@wfmjapan.org